opusdei.org

無原罪の聖マリアへ の9日間の祈り―6日 目

黙想のテーマ:「マリア、神の心を動かす」「憐みの母」「イエスのゆるしに感謝する」

1日~5日目の黙想

マリア、神の心を動かす

憐みの母

イエスのゆるしに感謝する

「憐れみ深い人々は、幸いである、 その人たちは憐みを受ける」(マタ イ5・7)。これは相互性のある特別 な幸せです。つまり、他者に与えた ことが、後ほど神の恵みとして私た ちに与えられるのです。また逆のこ とも起こります。神から頂く憐れみ は、私たちを他者に対してあわれみ 深くなるよう促します。これは、無 原罪の聖マリアの生活に見られるこ とです。例えば、カナの婚宴の場面 で、どのようにマリアが感じ、参列 者のために御子の祝福を届けられた かが分かります。招待客たちは新郎 新婦にお祝いを述べています。マリ アは、同時にあらゆる事に心を配り ます。なにか欠けていることに気づ きます。ぶどう酒が少なくなってい るのです。「カナにおける婚宴の喜 びのさなか、マリアだけがぶどう酒 の不足に気づいた。 (…) 小さなこ とにも気づくのは、マリアのように

神を愛するがゆえ熱烈に隣人を思い つつ生きる人だけである」 [1]。

マリアは問題に気づき、解決策を講 じます。マリアは御子が憐れみに満 ち、他者の問題に無関心でおられな いことをご存知です。それで御子に 近づき「ぶどう酒が無くなりまし た」(ヨハネ2・3)とだけ言われま す。マリアは、御子のあわれみ深い 心に訴えるのに、長々とした理由の 説明は不要であることを日常生活で 経験ずみでした。自分のすべきこと から手を離すことなく、助けが必要 なことを申し上げたらいいのです。 後は主が補ってくださいます。「マ リアは、人々の窮乏と貧困と苦悩の 現実の中で、彼らとイエスとの間に 立っています。マリアは『間に入 り』ますが、それは、第三者的な介 入者としてではなく、母の立場で、 御子に人々の欠乏を示すことができ る、いやむしろ、示す『権利を有す る』ことを意識している者としてな

のです」[2]。この9日間の祈りで聖母に、私たちの種々の心配事を委ねたら同じようにしてくださいます。

イエスの答えはマリアの言葉に無関 心であるかのように見えます。「婦 人よ、わたしとどんなかかわりがあ るのです。わたしの時はまだ来てい ません」(ヨハネ2・4)。御母に対 するこのような態度に私たちが戸惑 うのは当然です。「主への反論を考 えてみましょう。あなたは彼女に多 くの事を負っているのではありませ んか。あなたに身体を与えたのは彼 女です。いえ、体だけではありませ ん。彼女の心の奥底から出た『は い』で、あなたを懐胎し、母の愛で あなたを育み、イスラエルの民の共 同体に導き入れたのですしょる。

聖伝はこれらの言葉にカルワリオの 場面との並行性を見ています。両方

ともマリアに焦点が当てられていま す。カナでは、御子の「時」が来て いないときに仲介します。カルワリ オではその時が成就されます。「イ エスはマリアにその教会と全人類を 委ねています。十字架のもとで、マ リアがヨハネを自分の子として受け 入れるとき、又キリストとともにマ リアが、自分たちが何をしているか 知らない者のために御父にゆるしを 願うとき (ルカ23・34参照)、マリ アは、聖霊への完全な従順の中にそ の心を開き、全人類を抱擁する神の 愛の豊かさと普遍性を体験します。 このように、マリアはわたしたちー 人ひとりの母、そしてわたしたちす べての母、わたしたちのために神の いつくしみを獲得する母となりま す 1 1470

カナでのイエスの返事は、冷たい感じがしますが、それは外見だけです。なぜなら、ぶどう酒とは比較にならない素晴らしい「贈りもの」、

つまりご自身の御母を通して有り余 るほどの恩恵をもたらされようとし ておられたのです。この新郎新婦の 必要に心を配る無原罪の聖マリアの み心は、そこに全ての人を招き入れ るよう召されています。それは彼ら を神の限りない無償の愛へと導き入 れるためです。聖マリアは私たち に、御子が「正しい人を招くためで はなく、罪人を招くため」(マタイ 9・13)に来たことを思い出させてく れます。それで、「人間のどのよう な罪も、神のいつくしみを消し去っ てしまうことはありません。また、 神がその全ての勝利の力を放つこと を妨げることもできません。実に、 罪そのものが、奴隷をあがなうため にその御子をささげた御父の愛を、 ますます光り輝くものにさえするの です。わたしたちに対する神のいつ くしみが、あがないなのです | rst。

マリアは御子の返事に引き下がるこ とはなさいません。召し使いたちに 近づき言います。「この人が何か言 いつけたら、そのとおりのしてくだ さい| (ヨハネ2・5)。もはや、イ エスは反対することなく、大きなか めに水を満たすよう頼み、奇跡を行 います。その味見をした世話役はそ の見事な味わいに感嘆し、花婿に言 います。「だれでも初めに良いぶど う酒を出し、酔いがまわったころに 劣ったものを出すものですが、あな たは良いぶどう酒を今まで取って置 かれました」(ヨハネ2・10)。

パーティは滞りなく進んで行きました。その間、出席者のほとんどが起こったばかりの奇跡には気づかなかったでしょう。皆、確かにぶだう酒を堪能しましたが、その出所は知らなかったはずです。ですから、イエスは、後年、いつくしみ深くなるように、と人々を招きます。他者に、心に抱

いているもっとも高貴なことを、その真価を認めてくれるよう期待することなく、与えるよう、私たちを励まされたのです。と言うのも神は、私たちにそうしてくださったのですから。私たちは、侮辱されたとしても愛することができます。神の恩恵に依って生きているのですから。

「一人ひとりが、ゆるすことが必要なこと、ゆるしが必要であり、それが必要なことを思い起このでありません。これが、いっていればなりません。これが、いっているといるといるといるしながらゆるされることいっているように、私たちが他者に対していっくしみ深くなれるように、先に私たちをゆるしてくださいます。

この幸せにおいてイエスは、私たちが与えることのできることよりも、もっと多くの事を受けている現実を認識するようお望みです。何らかの形で私たちは皆、誰かに「負債」があります。まず神に対して、しかし

また、お世話になった多くの人、両 親や兄弟姉妹、友だちなどに対して もそうです。それゆえ、いつくしみ を必要とするのです。と言うのも、 多くのこれらの人々からもらった、 数々の善にお返しをすることはでき ない相談だからです。無原罪の聖マ リアの祝日を準備している今、マリ アが私たちに教えてくださいます。 「私たちが真に幸せな人になるの は、無償の愛の賜を下さる神の論理 を把握するときです。神が私たちを 限りなく愛されるのは、私たちを主 のように、限りなく愛することがで

[1] 聖ホセマリア『拓』631番。

きるようにするためです | トァァ。

[2] 聖ヨハネ・パウロ二世「救い主 の母 | 21番。

- [3] ベネディクト十六世、説教、 2006年9月11日。
- [4] 聖ヨハネ・パウロ二世「真理の 輝き」120番。
- [5] 同上 118番。
- [6] フランシスコ、一般謁見演説、 2020年3月18日。
- [7] フランシスコ、メッセージ、 2015年8月15日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-mugenzai-kokonoka6/(2025/12/16)